



学校だより

横浜市立相武山小学校

11月号

令和4年10月31日

～ まちのみんな ひとつになあれ ～



「学校行事と子どもたち」

学校長 後藤 直樹

少しずつ状況が好転してきている。そんな実感がもてる今年の運動会でした。学校行事を当たり前のように実施できなくなってからの3年間は、その意義や大切さを改めて教えてくれています。真剣な表情で演技に集中している子どもたちの姿は、見る者を引きつけ、目頭を熱くさせました。参観している保護者の皆様や、指導してきた職員もきっと同じ思いをもったに違いありません。開会式で「一生懸命に頑張る姿は格好いい」という話をしましたが、今年の運動会は、最後まで「格好いい」子どもたちの姿で満たされていました。私は、まだ残暑の厳しい時期から日々の練習を目にしてきたためか、感動もひとしおでした。

さて、5・6年生には自分たちの演技や競技の他に係活動という大切な役割があります。開閉会式の運営・応援団・決勝審判・採点・相武山ストレッチ体操・用具・机や椅子の準備・放送・スタート順表示・救護など、準備段階から貴重な休み時間を使ったり、家に持ち帰ったりして、任された仕事に責任をもって取り組む子どもたちの姿がありました。決して目立つ仕事ばかりではありませんが、どの役割が欠けても運動会は成功しません。

人の役に立った、人から感謝された、人から認められたという「自己有用感」は、自分と他者（集団や社会）との関係を自他共に肯定的に受け入れられることで生まれる、自己に対する肯定的な評価であり、それが社会性の基礎となる。

これは、国立教育政策研究所のリーフという出版物の中にある記述です。子どもたちは、役割を任されることで一回り大きく成長しています。互いに声を掛け合いながら、生き生きと係の仕事をしている子どもたちの姿、これは小学校の運動会のもう一つの見せ場といえるかもしれません。今回の運動会でも十分な参観スペースを確保するための入場制限により、閉会式の様子を全ての保護者にご覧いただくことは叶いませんでした。そこには得点発表に大きな歓声を上げ、素直に抱き合っって喜ぶ低学年の子どもたちの姿や、凛々しい顔で満足そうに正面を見据えている高学年の子どもたちの姿がありました。それは学校行事の意義と価値を改めて認識できた瞬間でした。

